
海の輝き

MUKKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の輝き

【コード】

N0264I

【作者名】

MUKKU

【あらすじ】

新一達は夏休みに伊豆のビーチへ行く事になり…

第1章 新一と蘭と少年探偵団（前書き）

前作の「思い出の桜」の時に書いた春夏秋冬の「夏」編です。
今までの作品の続きですが独立しています。

第1章 新一と蘭と少年探偵団

夏休み初日、新一が推理小説を読んでいると、

「ねえ…新一、今度海行かない？」

と蘭が言った。

「えっ？…」

新一は少し赤くなって顔を上げた。

が、蘭は赤くなっている新一をよそに、

「さつき、園子が高校最後の夏休みなんだからみんなで伊豆のビーチで楽しもうって言うからさ！和葉ちゃんや青子ちゃん達も呼んで行こうよ！！」

と言った。

海に行こうと言われて赤くなっていた新一だったが、今の蘭のセリフで落胆した。

その時、

「いいなー！歩美達も行きたい！！」

「オイ俺達も連れてってくれよ！！」

「あっそれいいですね！！」

という声がして、新一が振り向くと、哀、歩美、光彦、元太がいた。

「お…オメー等どうしたんだよ！？」

新一が焦って聞くと、

「何言ってるの？新一お兄さん！！今日歩美達と遊んでくれるって約束したじゃない！！」

「まさか忘れてたんじゃねーだろうな…」

「そんなの酷いですよ！！」

と言われて、

「わ…忘れる訳ねーだろ…」

と新一が焦って答えているのを蘭と哀はクスリと笑いながら見ていた。

「…で…連れてつてくれるよね!!」

しばらくして歩美が新一と蘭に聞いたすると、蘭が、

「さつき園子にメールして聞いてみたらOKだって!!」

と笑顔で言った。

「やったー!!」

元太、光彦、歩美が喜んでいると、

「…でも…泊まりだから小学生の歩美ちゃん達と一緒に行くには成人している大人がいないと…」

と蘭が困ったように言った。

その言葉に新一も、

「そうだな…俺達の中に成人してる奴いねえからな…」
と考えながら言った。

「だったら博士に連れてつてもらおうよ!!」

と歩美が言っていると、元太が

「でもよー、博士に頼むとどうせダジャレクイズ出すしよー…ダメだったら連れてつてもらえないぜ…」
と言った。

すると、哀が、

「じゃあ保険としてもう一人頼めば？」
と案を出した。

「保険つてそんな人僕達の周りにいますか？」

と光彦が言っていると、哀はチラッと新一を見て、

「大丈夫、その人に一緒に行くメンバーと、泊まりがけで行く事を伝えれば、絶対付いて来てくれるから…ねえ…工藤君?…」

と最後、新一にわざとらしく振りながら言った。

そのセリフに新一は哀が誰の事を言っているのか分かり冷や汗を
がいた。

「哀ちゃん、誰の事？」

と蘭が興味津々で聞くと、哀は新一に意味深な微笑みを向けながら、

「毛利探偵よ……」

と答えた。

そのセリフに少年探偵団の皆はその気になったが新一は、

(やっぱり……)

と、青くなりながら思った。

この後、少年探偵団に蘭と新一も行く事を知った小五郎は園子達に「過保護」と言われながらも付いて来て、少年探偵団は博士のダジヤレクイズに正解したため、新一、蘭、平次、和葉、快斗、青子、園子、哀、歩美、光彦、元太、博士、小五郎の13人での伊豆へ行く事が決まった。

第2章 別荘到着（前書き）

少し分かりにくいかもしれませんが。

第2章 別荘到着

旅行の予定は園子を中心に蘭、和葉、青子が電話で計画して、伊豆にある園子の別荘で宿泊する事になった。

ビーチも鈴木家のプライベートビーチで遊ぶ事にした。

また、園子の彼氏の真は大会が近いから来れなかった。

「ジャーン！！ここが私ん家の別荘！！蘭と新一君は前来た事あるよね！！」

別荘に着いて早々園子がハイテンションに言った。

「ああ…コナンの時に一度な…」

「それに殺人事件があつてあんまり楽しめなかったし…」

新一と蘭にはあまりいい思い出のある別荘ではない。

「そんな事件なんか忘れて今日は思いつ切り楽しもうね！！」

「そやそや！！こんな気持ちのええ日に事件起こすアホもおらんやろ！！」

青子と和葉もハイテンションでいた。

そんな周りが海で遊ぶ気満々な中、

「…で…その事件どんなやつたんや？工藤？」

「あつ俺も聞きたい」

という無神経な2人もいた。

「あつそうそう、新一君！服部君！黒羽君！」

新一と、新一から事件の内容を聞き出そうとしている平次と快斗に園子は話し掛けた。

「あんた達の彼女達がナンパされないように家のプライベートビーチにしてあげたんだから感謝しなさいよ！！」

その時、3人は共通して、

(余計なお世話だ!!)
と思った。

すると、

「お父さん!!来て早々お酒なんて飲まないでよ!!」

と言う蘭の声が出たどうやら小五郎はすでに酒を飲みだしたらしい。

そんな小五郎の様子を冷やかな目で新一が見ていると、

「ねえ新一お兄さん!!この別荘案内してくれない?前に来た事あるんでしょ?」

と歩美が頼んできた。

「いいけど…他の3人はどうする?」

と新一が聞くと、

「別荘の探検か?行くぜ!!」

「園子お姉さんの別荘なら何か珍しい物があるかもしれせんし!!」

と元太と光彦は行く気満々だったが哀は

「パス…」

と言って立ち去ろうとしたが、歩美に、

「哀ちゃんも行こうよ!!」

と笑顔で言われて行く事にした。

が、

「ハイハイ探検に行くのは部屋割りをしてからね!!」

と園子に言われて延期になった。

2人で一部屋使う事になったが男性陣が奇数だったため1つ3人部屋となった。

部屋順は奥から蘭と園子の部屋、和葉と青子の部屋、哀と歩美の部屋、新一と平次と快斗の部屋、小五郎と元太の部屋、博士と光彦の部屋となった。

新一達の部屋は無理やりこの3人にされたようなものだった。

部屋割り終了後新一は約束通り少年探偵団に別荘の案内（少年探偵団曰わく探検）をする事になった。

第3章 平和な一時（前書き）

なんか駄文です。

第3章 平和な一時

少年探偵団達の別荘探検やその他色々が終わった後、海で遊ぶ事になった。

(博士はビーチパラソルで休んでいるし、小五郎は近くの居酒屋に行っている)

新一、平次、快斗が蘭達が着替えて来るのを待っていると、歩美が哀を連れて来て、

「新一お兄さん！私と哀ちゃん似合ってる？」
と元気に聞いてきた。

「ああ！！似合ってるぜ！！」

と新一が笑顔で返すと歩美は嬉しそうな顔をして哀の手を引きながら元太達の所へ行った。

すると、

「新一君！！あなたの奥さん登場よ！！」

という園子の声がして振り替えた新一は言葉を失った。

「変…だった？」

新一が言葉を失ったので蘭が不安そうに聞いたが新一は蘭に見とれて声が出ないだけである。

「…べ…別に変じゃねーよ…むしろ…スゲー似合ってる…」

と、赤い顔で新一が答えると、

「なんや工藤…さっきの2人とエライ反応がちゃうやんけ…」

「歩美ちゃんはともかく、哀ちゃんは年上だぞ！！まあ…幼児化してるけど…それでもこの反応の差…なんか面白いなー新ちゃん(“新ちゃん”は有希子の声)」

と平次と快斗が新一を冷やかした。

しかし、

「平次ー!!どう?似合っとする?」

「快斗!!似合ってる?」

と和葉、青子にそれぞれ聞かれて、2人共新一と似たり寄ったりの反応であったため、

「バ一口…オメー等も同じだろ…」

と新一がその2人の反応を見て呟いたが、それを2人に聞かれてしまい、三つどもえの凄まじい口喧嘩へと発展した。

そんな姿を見ていた蘭達は、

「…蘭ちゃん…青子ちゃん…園子ちゃん…あんなアホ共置いてさっさと遊ぼう…」

「…そだね…新一君達がバ快斗と同レベルになってる…」

「…新一があそこまで熱くなるの事件以外で久しぶりに見たかも…」

「全く…あの男共はこんなに綺麗な彼女置いて口喧嘩とは…私が男だったら3人共さらっちゃうぞ…」と呆れながら行っていた。

さらに元太達は野次馬になっていた。

新一達の口喧嘩がヒートアップしてきた時、哀が冷たい声で、

「いい加減にしなさいよ…ここが園子さんの家のプライベートビーチだからいいけど…よくも恥ずかしくないものね…」

と言い放った。

「…哀…何怒ってるんだよ?」

と新一が聞いたが、哀は新一達を恐ろしい目で睨み、

「さ…吉田さん…行きましよう…」

と歩美を連れて去って行った。

新一達の口喧嘩はこれで強制終了したが、その後、30分程、それぞれに彼女に口を利いてもらえなかった。

最初にこのようないざござがあったがその後は何事も無く日が暮れるまで海での楽しい時間が続いた。

第4章 事件発生

夜1時新一と平次はベッドの上で推理小説を読んでいた。

快斗もさつきまで起きていて新一と平次に話しかけていたが、推理小説を読んでいる2人に邪魔者扱いされてつまらなくなつてふて寝をしている。

そんな時急に、

ドンドンドンドン！！

と部屋を叩く音がして、

「新一君！！大変よ開けて！！」

と、園子のとても焦つた声がした。

新一はドアを開けて、

「どうしたんだよ園子？」

と聞くと、

「蘭が…蘭がいなくなつちやつたの！！」

と答えた。

「蘭が！？どういう事だよ園子！？」

と新一が聞くと園子は、

「9時半頃に和葉ちゃんと青子ちゃんが一緒にトランプしようって呼びに来ただけけど…もう蘭寝てて…蘭一度寝るとなかなか起きないから蘭置いて和葉ちゃん達の部屋でトランプしてて…さつき12時過ぎて戻つたら蘭がいなくなつたの…」

と答えた。

「でもトイレ行ってるんじゃないか？」

と新一が聞いたが、

「トイレはもう全部搜したし、蘭はオバケとかダメだからこんな時間には暗い部屋にいないとおもう…」

と反論された。

「ネーチャン、和葉達んところ行った時鍵掛けたんか？」

と平次が聞くと、

「ちゃんと掛けたわよ…和葉ちゃんと青子ちゃんも見てたわ…帰って来た時も鍵は掛かってたのに蘭がいなくなってたの…それも、2人が証人よ…」

と答えた。

「…で…青子と和葉ちゃんは？」

と快斗が聞いた。

園子は、

「和葉ちゃんは小五郎おじさまを青子は阿笠博士を起こしに行ったわよ…」

と答えて、

「…そんな無駄話より蘭よ！蘭！新一君！！」

と新一に言ったがすでに新一は蘭の部屋に走って行っていた。

新一が蘭の部屋に行くと、

「何よ…この騒ぎ…今…1時よ…」

と哀が哀と歩美の部屋から不機嫌そうに出てきて、その後ろから歩美も眠そうに出てきた。

「悪い2人共…」

と新一が謝ると、

「…何があつたの？」

と哀は新一に聞いた。

新一は園子に聞いた事を哀と歩美に話した。

話し終わった時、蘭の部屋の前にみんな集まった。

「じゃあ…まだ遅いし…元太達は寝てる…」

と、新一は起きてきた元太、光彦、歩美に言ったが、

「嫌よ！！私達だって蘭お姉さんを捜したいもん！！」

「蘭お姉さんが行方不明なまんま眠れる訳ないじゃないですか！！」

「そうだそうだ！！それにもう一度寝たから大丈夫だぞ！！」

と、3人に反論されて、

「しゃーねーな…じゃあ少年探偵団の4人でまとまってるよ！！絶対にバラバラになるなよ！！」

と渋々承諾した。

その後、哀に自分が付けていた腕時計を渡した後、

「腕時計型麻醉銃だ…なんか武器になる物持ってた方がいいだろ…後オメー等は絶対に外にでるなよ！！」

と言ってから、

「じゃあ、少年探偵団以外は和葉ちゃんと園子はペアで別荘の中を捜してくれ…後、博士も中、青子ちゃんは黒羽とペアで中を捜してくれ…残りの俺、服部、おっちゃんの外だ！！」

と指示を出した。

こうして、行方不明になった蘭の捜索が始まった。

第5章 真夜中の捜索

新一が外に出た時、平次が、

「なあ工藤：捜すあてでもあるんか？…どうやって密室状態の中でネーチャンを誘拐したのかもわからんし…闇雲に捜すより相手がどうやってネーチャンを誘拐したのか考えるのを先にした方がいいんじゃないか？」

と聞いたが、蘭が行方不明になった事で冷静になれないでいる新一は、

「ウツセー！！今は蘭を見つけるのが最優先だ！！」

と平次に怒鳴った。

新一が冷静な判断ができないでいる事に気づいた平次は、

「工藤！！お前今俺の知ってる工藤やないで！！ネーチャンを見つめるのだって犯人がどうやって誘拐したのか分ればネーチャンを見つげやすくなるやる！！」

と強めの口調で新一に言った。

平次のその言葉で我に帰った新一は、

「…そうだな…もう少し冷静になんねーと…熱くなりすぎてたな…俺…」

と呟いた。

「せや！！だからまずは鍵のかかった部屋ん中からどうやってネーチャンを連れ出したかや…」

と冷静になった新一に平次は言ったが、

「悪いな服部：それはお前に任せた…最近事件ばっかで蘭とろくに話しもできなかつたし…心配ばかりかけてたからな…いち早く蘭を見つけてあいつを助けたいんだ…」
と言った。

「せやから先に謎を解かんと…」

と平次は新一の言っている事の意味が分からなそうに言った。

平次の言葉に対し、

「俺とお前が一緒に謎を考えるより片方が謎を考えてもう片方が蘭を捜した方が効率が良いはずだ…俺も蘭を捜しながら謎を考えるし…お前が謎を解いたら俺に連絡くれよ！！それとも俺がいないと不安なのか？西の名探偵服部平次君？」

と新一は言った。

最後に新一が言った冗談に平次は、

「んなわけあるかい！！」

とツツコミを入れてから、

「じゃあ…工藤頑張れよ！！」

と言って新一と別れて謎を解くために別荘へ向かった。

平次は別荘に向かう途中、新一の方に振り返って、

「いつもの工藤復活やな…」

と呟いた。

平次と別れて蘭を捜し始めて30分が経過した。

未だに平次からの連絡は無い。

(流石にまだ服部からの連絡はねーな…蘭の方は携帯繋がんねーし…にしてもこんな真夜中だと全く人がいねーな…これじゃ目撃者もいねーだろうな…ヘタすりゃ俺も不審者だ…)

と心の中で呟いた時、DBバツチの呼び出し音が鳴った。

新一は慌てバツチを取り出して、

「どうした！？蘭見つかったか！？」

と聞くと、歩美の泣きそうな声が聞こえた。

「どうしたんだよ！？歩美！？」

と新一が聞くと、

「し…新一お兄さん…どうしよう…あ…哀ちゃんがなくなっちゃった…」

と泣きながら言つ歩美の声でした。

第6章 第二の事件

『哀ちゃんがいなくなっちゃった…』

歩美の言った言葉を聞いた新一は歩美に、

「いったい何があつたんだ!？」

と聞いた。

しかし歩美は泣いていて答えない。

新一は泣いている歩美に、

「安心しろ…今そこに行つてやるから…」

と優しく行つた。

新一が別荘に向かつて走つて走っていると小五郎が、

「どうした?…蘭がいたのか!？」

と聞いてきた。

新一は悔しそうな顔で、

「…イヤ…哀がいなくなつたらしい…今、歩美達の所に行つて来る

…蘭と関係あるかもしれないからおっちゃんも来てくれないか?」

と言つた。

小五郎は、

「ああ…分かつた」

と言つて新一と一緒に別荘へ向かつた。

別荘に新一と小五郎が着くとすでにみんなが集まっていた。

「…いったい何があつたのか詳しく教えてくれ」

と新一が歩美に聞くと、泣いている歩美の代わりに元太と光彦が、

「俺達が蘭姉ちゃんを捜してたんだけど気付いたら灰原がいなくなつてたんだよ…」

「灰原さん…いつも通りみんなより後ろを歩いていましたから…隠れていた犯人に捕まっても…僕達気付かなかつたんです…」と説明した。

「あいつ未だにみんなより後ろを歩いているのかよ…情けねー…あいつのそういう事忘れてたぜ…」

と元太達の説明を聞いて新一は呟いた。

その時、新一より前に集まっていた平次と快斗が新一の近くに来て、

「工藤…この短時間で2人が消えたっちゆう事は…事件の可能性が高まったっちゆう事やな…」

「だとしたら犯人は哀ちゃんの後ろから回り込んで薬で眠らせたって考えられるな…」

と言った。

新一も2人と同じ考えであった。

「…ところで服部…犯人が蘭の部屋の中に入ったトリック分かったか？」

と新一が聞くと平次は悔しそうに、

「分からん…第一犯人がどうやって別荘に入ったのかも分からんし…もともとこの別荘にいた連中はそんな事する奴やないしアリバイもあるで…」

と言った。

それを聞いた和葉は、

「ちよつと平次!!それって私達を疑つたっちゆう事!?!」と聞いた。

「まあ…そういうこつちやなあ…」

と平次が言つと、

「ちよつと服部君それは酷いんじゃない!?!」

「そつだよ!なんで青子達が蘭ちゃんや哀ちゃんを誘拐しないとい

けないの!？」

と園子と青子も平次にくっついてかかった。

すると新一が

「3人共落ち着けよ、俺だって今服部が言った事を仮定したぜ…探偵はこういう場合疑っちまうんだ…悪いな…」
と3人に謝った後で、

「けど今は蘭と哀を見つけるのが最優先だ…」
と真剣な眼で言った。

第7章 探偵団バッチ（前書き）

久しぶりの投稿です。

第7章 探偵団バッチ

「けど捜すあても無いのにどうやって蘭達を見つけるの？」

と園子が新一に聞くと、平次が急に、

「そつや！！工藤！！あのちっこいネーチャンがさらわれたんやったらお前のあの妙ちきりんな眼鏡で見つけられるんちゃうか！？」と叫んだ。

「妙ちきりんって……」

と博士は言ったが、

「そうですね！！新一お兄さんの追跡眼鏡があれば……」

「哀ちゃんの付けてる探偵団バッチの場所が分かる……」

「確かに普通バッチに発信機がついているなんて誰も思わないよな！！」

と少年探偵団の皆は嬉しそうに言ったが、

「ダメだ……追跡眼鏡なんて普段使わねーからこの姿に戻ってからあらかじめ使つと分かってる時以外持つてねーよ……もちろん今日も……」と新一は苦々しげに言った。

「そついえばそのバッチ、トランシーバー機能があるんやなかった？」

と和葉が新一に聞くと、

「でも……きつと歩美達がもう連絡してダメだったから俺に連絡してきたんだと思つぜ……」

と新一が答えたが、

「あ……！！！！！！灰原さんがいなくなっちゃった事に動揺して忘れてました……！！」
と光彦が叫んだ。

「なら見つけるチャンスあるよ……哀ちゃんにどこにいるか聞けばいいの……蘭ちゃんも一緒にいると思つし……！！」と青子も乗り気で言った。

「そうだな…じゃあ俺が連絡する…」
と言ってバッチを取り出した。

「哀!! 聞こえるか!? 応答してくれ!!」
と哀を呼び出しながら新一は叫んだ。

すると、窓際にいた小五郎が、
「なんか…外からピーピー聞こえねーか？」
と言った。

新一はそれを聞き終わらないうちに窓から外に飛び出して音の場
所に向かった。

しかし、新一がたどり着いた所には哀のDBバッチが捨てられて
いた。

「クソッ…」

新一は悔しそうに呟いて自分のバッチの電源を切った。

「あつ新一お兄さん!! どうだったの?」

新一が持って来た事に気付いた歩美は新一に聞いた。

「哀のバッチ捨てられた…」と新一がバッチを見せながら言った。

「そんな…」

と落胆している歩美に新一は哀のバッチを渡した。

「これはお前が持つててくれ…」

と新一は歩美に頼んだ。

「で…これからどうするんや? 工藤…」

と平次が聞くと、新一は携帯で時間を見て、

「もう3時か…皆寝てくれ…」

と言った。

「ハア? どういう事だよ?」

と快斗が聞くと、

「明日も2人を捜す事になるから今休んどかないと体力が持たない
だろ…」

と答えた。

「けどよお前はどつするんだ？」

と小五郎が聞かれ、

「じゃあ、俺とおっちゃん和服部と黒羽で30分交代で捜すつてのは
どうだ？…で朝になったら捜索範囲を広げて皆で捜す…子供達と
博士あと女の子達は中で捜してくれ何か手掛かりがあるかもし
れないし博士と子供達は一緒にいろよ」

と皆に言った。

すると快斗が、

「なら新一、お前が最初でいいぜ…お前は蘭ちゃんとも哀ちゃんとも
親しいしな」

と新一にウインクしながら言った。

「おう！じゃあ俺が最初だ…」

と新一は言って別荘を出て行った。

第8章 謎の女（前書き）

久しぶりの投稿です。

少し駄文になってしまったかもしれませんが。

第8章 謎の女

新一は蘭と哀の捜索にでたが、あてが全く無いため範囲を広げて捜索する事にして園子の家のプライベートビーチの外に出て、近くの砂浜に来ていた。

「遠くまで来ちまったな…帰る時間を入れたら15分くらいしか蘭達を捜す時間がねー…」

と新一は携帯を見ながら呟いた。（新一の腕時計は行方不明の哀に貸したため無い）

新一が蘭達を捜していると、10m程前を歩いている人影を見つけた。

（今…午前3時18分…なんでこんな時間に砂浜をうろついているんだ？…あの人？）

新一はその人物に近づいてみた。

（見たところ女のみたいだな…）

と考えながらその女性に近づいてみた新一は驚愕した。

上から下まで黒い服を身にまとっているのだが、彼女の後ろ姿は蘭にそっくりだったのだ。

「蘭!！」

新一はそう言っつてその女性の肩に手を置いた。

しかし、

「何でしょうか？」

と言っつて振り向いたその女は蘭とは別人だった。

マスクとサングラスで顔はよく見えないが、目は蘭よりも鋭く、声も口調も別人だった。

「あ…すいません…捜していきり人に後ろ姿がそっくりだったので

…」

と新一が謝ると、

「そう…」

と言つて去つて行つた。

(後ろ姿だけで蘭と間違えるなんてな…)

と自嘲していた新一だったが、こんな夜中にサングラスをしてうるついている女を怪しいと思ひ彼女に気付かれないように尾行する事にした。

暫く新一は彼女を見張つていたが、彼女は全く怪しい素振りを見せなかつた。

新一は、何か怪しい取引をするつもりじゃないかとも考えたが、周りを見渡したり、時間を気にしている気配も無いためその考えはすぐに捨て去つた。

しかも、彼女はここから移動する気配もない。

(何なんだ…あの人?)

と新一が考えていると、新一の携帯が鳴つた。

(ヤベー!)

と新一は焦つたが女には気づかれていない様子だった。

新一は気づかれていない事に安心して電話に出たが、

『コラア!! 探偵坊主!! 今何時だと思つてるんだ!! 早く戻つて来い!! もうお前の捜す時間10分も過ぎているだろ!! お前まで誘拐されちまつたと思つただらうが!!』

という小五郎の怒鳴り声は流石にに聞こえてしまった。

新一は見つからないように隠れてから、

「ワリー…おっちゃん…つい時間を忘れてた…」

と小五郎に謝つた。

「じゃあ今帰るからおっちゃんは蘭達を捜してくれ!」

と新一が言つと、

『テメーに言われなくても最初からそのつもりだ！』
と言つて小五郎は携帯を切つた。

女は蘭達の失踪とは無関係だろうと考え始めていた新一は、小五郎に怒られた事で園子の別荘に帰って朝が来るまで仮眠を取る事にした。

第9章 夜明け（前書き）

今回は一時的にほのぼのした空気です。

第9章 夜明け

新一が仮眠を取って1時間程して、

「新一お兄さん！朝だよ起きて！！」

という歩美の声で新一は目を覚ました。

「ああ…朝か…おはよう歩美ちゃん…」

と言いながら新一は起き上がり、辺りを見渡すと、ちょうど平次も光彦に起こされたところで、元太が起こしている小五郎は未だに爆睡していた。

「なあ…歩美…他の皆は？」

と新一が聞くと、歩美は、

「もう皆起きてるよ！寝てたのは遅くまで哀ちゃん達を捜してた新一お兄さん達だけだよ」

と答えた。

すると元太が、

「どうでもいいけどよー、おっちゃん全然起きねーぞ」

と新一に言った。

「娘が行方不明やつちゅうのに呑気なもんやなー」

と平次は寝ている小五郎を見て呆れたように言った。

「でも困りましたねー…」

と光彦も困ったように言ったが、新一はそのまま部屋を出て行った。

「オイ！！工藤！！おっちゃんあのまんまでええんか！？」

と平次が焦って聞いたが、新一は平然として、

「おっちゃんを起こすにはいい手があるからな…まず黒羽呼ばねーと…」

と言って皆が集まっている部屋に入った。

部屋の中では皆朝食の準備をしていた。

「あつ新一君！！早く手伝って！！」

と新一に気付いた園子に言われたが、

「ワリー！！おっちゃん起こすのが先だ。ちょっと黒羽借りるぜ！！」
と言って、テーブルにスプーンとフォークを並べている快斗を連行した。
「オイ！！新一なんなんだよ！！」
と連行された快斗は不機嫌そうに言った。
「おっちゃん起こすのに手貸してくれ」
「ハア？どういう事だ？」
新一の言いたい事の訳が分からない様子の快斗だったが何をするか新一が耳打ちした途端急に乗り気になった。

「じゃ、よろしくな！！」
と小五郎の寝ている部屋に入った新一は快斗に言った。
ちなみにこの部屋には新一が何をするつもりなのか興味を持った平次と少年探偵団もいる。
「新一お兄さん、どうするの？」
と歩美が聞くと、新一は、
「まあ、見てなって」
と言った。

平次達が興味津々で見ていると、
「あなた！！早く起きなさい！！こんな状況の中寝ていられるなんて…！どういう神経してるのよ！？」
と物凄い殺気立っている英理の声色で言った。
その声色に小五郎は、かなり焦った顔で飛び起きた。
その様子を見て笑っている、新一、平次、快斗、少年探偵団を最初訳が分からないように見ていたが、
「なんだ…マジシャン坊主の声色か」

と安心したように呟いたのであった。

この後、新一達は朝食を食べてすぐに蘭達の搜索を再開した。

第10章 4人の失踪（前書き）

展開が急で読みにくいかもしれませんが……ご了承ください。

第10章 4人の失踪

新一達が行方不明になっている蘭達の搜索を再開して、2時間が経った。

既に日は昇りきっていて暑くなり始めていたが、新一達は気にせず2人の搜索を続けていた。

新一は夜中の搜索で怪しい女を見かけた辺りを捜していた。すると快斗がいたので合流して搜索を始めた。

しかし新一達が今いる所はとても繁盛しているビーチのため人が多い。さらに新一と快斗は何度もビーチに来ている女の子に声を掛けられている。そのため2人は蘭達の搜索をここするのは不可能だと判断した。

その時、別荘内で2人の搜索をしている少年探偵団達は、大きな書齋にいて、元太が本棚をよじ登っていた。

「元太君！！そんな所登っちゃ危ないよ！！」

「そうですね！！博士がトイレから帰って来たら怒られちゃいますよ！！」

と歩美と光彦に注意されたが元太は、

「大丈夫だ！！」

と言って登り続けた。

しかし、その直後、数冊の本諸共落ちてしまった。

「イテテテテ……」

「だから言っただじゃない、危ないって！！」

と歩美が元太を叱っている時、光彦は元太と一緒に落ちてきた本に挟まっている少し古そうな紙を見つけた。

「何ですか…これ？」

と光彦が拾うと、歩美と元太も興味を持って覗き込んだ。

それを紙に書いてある事を見た3人は、

「こ…これは!？」

と言う叫び声を上げた。

一方、やつと人混みからぬけさせた新一達は、

「つたく…俺達海で遊ぶような格好してねーだろ…」

と何度も女の子に声を掛けられた事に関して鬱陶しそうに呟いた。

新一のぼやきを聞き終えた快斗が、

「けど新一、何であんな人が多くて捜しにくい所捜してたんだ？
いつもだったらもつと効率的な捜査するじゃんか」

と聞くと、

「ああ…昨晚蘭達を捜しているときそこで怪しい女を見かけたんだ
…だから何か手掛かり残ってねーかと思っただけで流石にねーか
…」

と新一は答えた。

その後、その女の事を快斗に詳しく話すと、

「俺も昨晚その人見たぜ…」

と答えた。

「なっ!?!?!…」

と絶句している新一だったが、我に返って、

「なら…その女をおっちゃんや服部も見てるかもしれないな…」
と呟いた。

新一の台詞に快斗も、

「ああ…昼飯の時に2人にその事聞いてみた方がいいな…」
と同意した。

暫くして新一と快斗が一旦別荘に戻ると、博士が青い顔で出て来た。

「どうしたんだよ博士!？」

と新一が聞くと、博士は、

「子供達がいなくなってしまうたんじゃ…」
と言った。

「なっ!！」

と新一と快斗が驚いているなか博士はさらに続けた。

「スマン…子供達とこの別荘の中を捜していたんじゃが…ちよつとトイレに行っている間にいなくなってしまうたんじゃ…しばらく捜して、新一君に連絡しようとした時ちよつど2人が来たんじゃ…」

博士の話聞き終えた新一は、

「博士のせいじゃねーから気にすんなって」

と博士を慰めた後、バツチで3人を呼んだが反応が無かった。

その後新一は、

「黒羽!!俺はおつちゃんと園子に連絡するから、お前は服部と青子ちゃんに連絡してくれ!!あと服部には和葉ちゃんに連絡するよ
うに頼んどいてくれ!!」

と快斗に指示を出して自分も小五郎に連絡した。

小五郎に連絡したすぐ後に園子に携帯で呼び出したが一向に出な
かった。

その後、園子以外の全員が集まっても園子は電話から出なかった。
「なあ…工藤…そんなに呼び出しても繋がらへんって事はそのネー
チャンも誘拐された可能性が高いっちゆうことやな…」

とその様子を見ていた平次が新一に言った。

「ああ……だな……」

と、新一も苦々しげに呟いた。

第11章 最悪の仮説

新一が誘拐された6人の事を考えていると、不意にある考えが頭をよぎった。

「ん？どうした新一？急に顔が青くなったぞ…」

とその時の新一の表情をちょうど見た快斗は新一に尋ねた。しかし新一は、

「べ…別になんでもねーよ！！ハハハ…」

と明るく言った。

すると平次が、

「まあ…腹も減ったし、飯にしようや」

と言った。平次のその台詞は、

「ハア！？平次今の状況分かつとる！？子供達まで誘拐されたんやで！！呑気にご飯食べとる場合ちゃうで！！」

「そつだよ！！ちゃんと捜さないと！！」

と和葉と青子に非難されたが、平次は、

「状況は分かつとる…捜すつたつてどこ捜せばいいのかわからんし…『腹が減つては戦はできぬ』つちゆうやる！」

と答えた。

「そんな事言つたつてお前なあ…」

と小五郎が言いかけた時、新一が、

「服部の言う通りかもな…あんまり無理しすぎるといざという時にヤバくなる…」

と言つたため昼食を食べる事になった。

食事中、平次が、

「…で誰かなんか収穫あつたんか？」

と聞くと快斗が、

「俺あつたぜ!!」

と答えた。

「それってなんだ!?!」

と新一が聞くと、

「…なんで新一が驚くんだよ…夜中に俺も新一も見かけたあの怪しい女の事だぜ…」

と快斗は言ってから皆に詳しく話した。

すると平次が

「俺も見たでそいつ…そんな時は別に怪しいっっちゃう感じせーへんかつたけど…今考えるとめっちゃ怪しいで」

と答えた。

「けど、なんでこんな事をするんじゃないだろうか…」

と博士が呟いた時、新一が、

「皆、俺のクラスメート…か…」

と呟いた。

新一の台詞で、

「ホンマや!! 蘭ちゃんと園子ちゃんは今工藤君と同じクラスやし、哀ちゃん達はみんな工藤君がコナン君やった時のクラスメートや!!」

と和葉が驚いたように叫んだ。

「でも新一君がコナン君だったって事知ってる人殆どいないし、みんな良い人だから偶然なんじゃない?」

と青子も言った。

その2人の台詞で平次と快斗も新一の頭によぎった仮説と同じ仮説が頭をよぎった。

「…イヤ…もし…奴等だったら…」

「もしかするで…」

その仮説が頭をよぎった2人が重々しく言うと、小五郎が、

「奴等って誰だよ!!」

とイラついたように言った。

「なんや…おっちゃん分からんか？奴等にもし残党がいたとしたら…もしかしたら工藤の秘密知つとるかもしれん…」
と平次が言った。

その台詞で博士は分かったようで驚いた表情をしていた。

「あの組織の規模からしてまだ捕まってる残党がいてもおかしくないしな…」

快斗のこの台詞で他の皆も新一達の仮説に気付いたようだった。

「ま…まさか奴等って…」

と小五郎が青い顔で呟くと新一が小さいが良く聞こえる声で、

「そう…1年前…俺の体を小さくしたあの組織だ…」

と言った。

第12章 気絶（前書き）

サブタイトル微妙です…。

第12章 気絶

新一達が組織が関係しているかもしれないという仮説を言った後、周りはとても暗い空気になった。

その空気に耐えられなくなった平次は、

「けどこれはあくまで俺等の仮説や！まだ確証は無いし、組織を壊滅させに行った時、誰もあの坊主が工藤やって気付いてる様子無かったで！！」

と言った。

快斗も、

「それに組織の中で新一が幼児化した事を知っていたのはベルモットって奴だけみたいだし、そいつは新一を組織と関わらないようにしてたみたいだから他の奴にバラしたりしないさ！！」

と続けた。

しかし、新一はボソツと、

「アイリツシュ…」

と呟いた。

「アイリツシュ！？なんやそれ！？そんな奴聞いた事無いで！！」

「まさかそいつに正体バレたのかよ！！」

新一の呟きに平次と快斗が反応した。

2人の反応に新一は、

「ああ…組織のメンバーのアイリツシュには俺と江戸川コナンが同一人物だって事がバレた…」

と答えた。

その言葉に、

「じゃあ…その人からコナン君と工藤君が同一人物やってその組織にバレて…その復讐のために蘭ちゃん達が誘拐されてもったって事？」

と和葉が心配そうに言った。

新一は、

「イヤ…アイリツシユはジンが俺を殺し損ねた事を俺を捕まえてから組織に報告するつもりだったらしいし…俺を捕まえる前にジンに殺されちまったからそれはねーよ…」
と答えた。

「だったら関係ないんじゃないの？」と青子が言うと、小五郎が、
「イヤ…さっきマジシャンの坊主が言っていた怪しい女ってのがアイリツシユって奴と親しくて…そいつが話していたという場合もある…まあその場合動機はその組織を壊滅させた事よりアイリツシユって奴の復讐かもしれんな…」
と言った。

小五郎の台詞に平次は驚いて、
「おっちゃんなんか今日冴えとるやんけ…」
と呟いた。

「…じゃが…今話した通りだとしたら…哀君や蘭君達は…もう…」
と博士が言ったが、快斗が、
「イヤ…それはないと思う…新一への復讐のために蘭ちゃん達を殺すつもりならその場で殺すか新一の目の前で殺すはずだ…だから今のところ皆無事だと思う…」と否定し、
「それに…まだ組織の仕業って決まった訳やない…違う可能性だつてある…今言える事は早く皆を助け出さなあかんっちゅう事や…！」
と平次も続けた。

その途端、新一は立ち上がり、
「俺…先蘭達を捜してるからよ…！」
と言って平次達が制止するのもかかわらず部屋を出て行った。

新一は組織の残党が犯人かもしれないという仮説を立ててから自分が冷静でなくなっている事に気付いていたが何かしないといられない気持ちになってしまい、飛び出してしまったのだ。

しばらく歩いていると夜中に見た女が歩いているのを見かけた。

気付かれないように尾行をし始めた直後首に何か刺さる感じがしたと思ったら新一は意識を失ってしまった。

第13章 無人島にて

ザーン ザーン

新一は波の音で目が覚めた。

「…っ…ここは…」

と辺りを見渡したが誰もいる気配はない。

(どうやら俺も誘拐されちゃったみたいだな…情けねー…)

と思いながら新一は立ち上がった。

新一は携帯を奪われていない事に気づくと平次達に連絡しようとしたが案の定圏外だった。

(…こんな海辺で圏外か…予想はしてたけどおそらくここは無人島だろうな…人の気配無いつてことは犯人に置き去りにされたな…こりゃ…)

と新一は思った。

新一は携帯で時間を見ると18:08だった。

それを見て新一は、

(随分気絶してたな…)

と思いフツと笑い、もしかしたら蘭達がいるかもしれないと考え島を廻ってみることにした。

この島は半径500m程の小さな島なので新一は約20分でこの島の3分の2を廻っていた。

そこで新一は小さな洞穴を見つけた。

(もし何日かこの島で過ごすことになったらここで雨風を凌げそうだな…)

と新一は考えながらそこを通り過ぎた。

数分後新一は島を一周していた。

(結局何も無かったな…日が完全に暮れちまう前に薪探さないとな…暗くなつてから森に入るのは危険だ…)

と新一は考え、森に入った。

森に入ったといつても新一はあまり深くまで行かずすぐに森から出れる辺りをキープしていた。

新一が薪を探し始めて少しした時、新一は何かの気配を感じ取った。

(この気配…獣じゃねーな…フツ…やっと犯人のお出ましってわけか…)

新一はそう思いながら気づいていないふりをしながらさっき見かけた洞穴に向かった。

洞穴に向かう途中、

(やっぱり尾行して来たか…だか尾行はド素人だな…)
と新一は推理していた。

(…こりゃ組織の残党の仕業じゃねーな…奴らならこんな下手な尾行するはずねー…じゃあ何者なんだ?)

と新一は考え今までの経緯を頭の中でまとめ始めた。

なぜかこの無人島に来てから新一は冷静さを取り戻している。

「……………」

新一はしばらく無言で考え続けていた。

すると突然ある考えが浮かび、

(なるほど…そういう事か…そう考えれば疑問はなくなる…!)
と不敵に微笑んだ。

洞穴に着いた新一は洞穴に入って洞穴の外で身を隠している人物
に向かって話し出した。

「隠れてねーで出て来いよ…もう全て分かってるんだよ」

「…園子…」

第14章 新一の推理

「…園子…」

新一の言葉で園子はばつの悪い顔で出て来て、

「あちゃーバレちゃったか… ってことはもう分かっているよね…」
と言った。

「当たり前だ！… まあ証拠は別荘に残ってるかもしれないが今は無人島だ… 証拠を見つけないのは不可能だからほぼ想像だ… けど俺の推理通りなら辻褄も合うし園子が出て来たってことはこの推理が合ってるってことだろうな…」

と新一は前置きをしてから推理を話し始めた。

「まず、この失踪事件は誘拐じゃねーな… 少なくとも蘭、哀、園子が消えた事件は… この3人は自ら失踪したんだ。

蘭が消えた事件は蘭が寝たふりをして園子が和葉ちゃん達の部屋でトランプをしに行った後自分で出て行った… 自分で出て行くなら犯人が鍵の掛かった部屋に侵入する必要も無いからな…

哀が消えた事件は消えた蘭を捜しているとき頃合いを見計らって消えればいい…

園子お前も同じだ…

お前らは消えた後はおそらくお前の彼氏の京極真さんの家の旅館でもいたんだろ？この近くだし…

違うか？」

新一は園子を睨んで聞いた。

新一は園子の答えを待つ前に続けた。

「…で俺が夜中に見かけた女はおそらく蘭だ…

黒羽もグルなんだろ？あいつは俺の母さん以上に変装するのもさせるのも上手いからな… 黒羽が蘭を変装させたわけだ… さっきお前に尾行されてる間に見つけたぜ… 俺に取り付けられている発信機を俺に気付かれずにこんな物取り付けられるのは黒羽くらいだしな… そ

れにこの発信機は博士が作った発信機だ…きつと哀が用意したんだろ…この発信機で俺の位置を知ってそこに現れたんだろ…

声が違ったのは哀のマスク型変声機を使ったんだ…あとあのサングラスは追跡眼鏡のサングラスバージョンってところか？哀が博士に頼めば簡単に作ってもらえるだろうし…顔を変えている人間がサングラスまで掛けて変装する必要ねーからな…」

ここまで新一が言った時、

「流石ね…でも少し間違えてるわよ…名探偵さん」

という聞き慣れた声がして、声の主が現れた。

「あ…哀？」

と新一が驚いて聞くとその人物は、

「あら…今の私は灰原哀じゃなくて宮野志保だけど？」

と怪しく微笑みながら言った。

新一の前に現れたのは灰原哀が元に戻った姿の宮野志保だった。

「…宮野…どうして？」

と新一が聞くと志保は、

「フツツ…思った以上に驚いているわね…あなたも2回程飲んだ未完成の解毒剤を飲んだのよ…」

で、あなたが間違えているのは、あなたが夜中に見た女は蘭さんではなくて私だということよ…」

私達は消えた後、一緒に旅行に来た誰とも接触してないわ…あなたに疑われるといけないからね…私は消える前から黒羽君に蘭さんの髪型そっくりのカツラを作ってもらってそれを被っただけ…

あなたとはこの姿で会ったことはあるけど、髪型で蘭さんと思ってたあなたは心理的に蘭さんとは別人だったとしか思わないから私に気付かたってわけ…まあ、マスクとサングラスはあなたの言った通り博士の発明品…けど、顔を隠すためでもあるわ…

さて、私達がなんでこんな事をしたのか分かってるんでしょ？」
と言った。

志保の問いに新一は、

「ああ…最近事件ばつかで蘭と一緒にいられる時間が殆ど無かったから…だろ？」

と答えた。

「正解、あなた自覚してたのね…まあ最初は開発した薬の実験体になってもらうつもりだったけど…あなたにはこっちの方がいいと思っつてね…まあいいわ…最後にこれは分かるかしら？」

と志保が言くと、2人の人物が出て来た。

「なっ！！」

新一はその2人を見て声を出してしまった。

なんとそこには蘭が2人いたのだ。

「あなたは本物の蘭さんを見分けられるかしら…」

新一に向かって志保が呟いた。

第15章 選択(前書き)

なんか分かりにくいかもしれないです。

第15章 選択

2人の蘭を見て新一は、
「なるほど…本物の蘭を見分けろってことか…もし間違えたらどうなるんだ？」

という新一の問いに志保が、
「それはあなた達の絆がその程度だっただけの事…蘭さんに別れるって言われてもしょうがないわね…でもあなたなら判るでしょ名探偵さん？」

と答えた。志保の答えの後、蘭は2人共不安げに

「「新一…」」
と同時に呟いた。

どちらも声は同じであった。

しかし、新一はフツと笑って、
「バーロオ！！これは俺が探偵かどうかなんて関係ねーよ！！物心つく前から蘭とは一緒にいたんだ！！判るに決まってるだろ！！」
と言い、

「宮野…この2人の中には蘭はいねえ！！両方偽物だ！！」
と答えた。

「…本当にその答えでいいのね？工藤君？」
と聞いたが新一は自信満々に、
「ああ！！」
と答えた。
すると、

「あーあ、バレちゃったか…」
と言って、青子は髪型を直した。

「…そつちが青子ちゃんって事はもう片方が黒羽って事か…」
と新一が言つと、

「当たり前!!」

と快斗がマスクを外して、

「けど、他人の声が出せるのは俺だけだからもう一人は蘭ちゃんだ
って思うと思っただのになー」

少し残念そうに言った。

すると新一は、

「ああ…お前がグルだって分かったら服部もグルなんじゃねーかっ
て思っただ…服部もグルだったらその謎も簡単に解けるぜ!」
と答えた。

園子が

「どうして?」

と聞くと新一は、

「俺がコナンだった頃、訳あってに服部に今の姿の俺に変装しても
らった事があるんだ…園子は知ってると思うけど、季節外れのハ口
ウィンパーティーの時にな…それと同じじゃねーけど似てるトリッ
ク使ってたんだろ?…青子ちゃんの服にスピーカーとマイク付きのカ
メラでも付いていてそれをどっかで見てる蘭が話す声に合わせて青
子ちゃんが口パクしてたんだろ?…あの時の俺は服部の推理を聞いて
その推理を話すだけだったけどな…」

と言った。

「正解ね…もうここにいる必要もないし…さっさと帰りましょ…」

と志保が答えると新一は、

「最後に元太達は園子が失踪するのを見られて訳を話して一緒に消
えてもらったってわけか?」

と聞き、快斗も、

「…で…消えたのはみんな新一のコナンだった頃と今のクラスメー
トだから組織の仕業に見せられるかもしれないって思っただけに計画
変更したんだろ?共犯者の俺達も一瞬ヒヤツとしたぜ…」
と続けた。

すると志保はキョトンとした顔で、

「小嶋君達がどうかしたの？」
と聞いた。

「えっ!?!」

と快斗と青子が驚いていると、新一が志保に少年探偵団の皆が消えた話を話したて、

「…これもお前等がやったんだろ？」

と聞いたが、志保は青い顔で、

「いいえ…」

と答えるだけであった。

皆呆然としている中最初に動いたのは新一だった。

「園子!! 船どこにある!?! どうせここお前んちの島なんだろ!?!」
と洞穴を出ながら聞いた。

「この洞穴のちょうど裏側よ…鈴木さんがあなたを尾行している間にそこに停めたの…尾行に気づけばあなたはここに来るはずだと踏んでたから…」

と園子の代わりに志保が答えた。

船に着いた時、新一は船に誰もいない事に気付いた。

「…誰もいない…」

と新一が呟いていると快斗が、

「俺が運転してきたんだ!!」

と言った。

「黒羽…どの位で着くんだった？」

と新一が聞くと快斗は、

「事故らないように急いで1時間位だ!!」

と言って船を発進した。

第16章 安堵（前書き）

展開が早いかもしれません。

第16章 安堵

新一は船に乗り込んでからずっと携帯の画面を見て、携帯電話の圏内に入るのを待っていた。

50分程してやっと圏内に入った直後新一は平次に電話をかけた。

『おっ！！工藤！！もう戻って来たんか！？思ったより速いな』
と事情を知らない平次は呑気に話し始めたが、新一に、

「バーロオ！！今それどころじゃねー！！」

と怒鳴られて、

『何があつたんや？』

と聞いた。

新一から事情を聞いた後、

『分かった…今から和葉とネーチャンとこ向かうお前等も早う来るんやで！！』

と言つて電話を切った。

平次との電話の数分後、新一達の乗った船は目的地に着いた。

「新一！！」

新一が船から降りた途端蘭が新一を呼ぶ声が聞こえた。

「蘭…」

新一が呟くと、

「新一…良かった…あの2人の中に私がないって事分かったんだね…間違つてたら快斗君変装解いてないはずだから…」

「ああ…間違える訳ねーだろ！！」

と新一と蘭が会話をしていると、

「オイ…工藤…今の状況忘れてネーチャンといちゃついてるんやな

「いやろうな……」

と息を切らした平次の声がした。

「服部!？」

我に帰った新一が辺りを見ると平次だけじゃなく、志保、快斗、青子、和葉も新一を呆れたような顔で見ている。

「わ……忘れる訳ねーだろ!!バァロオ!!」

と新一が焦って言っていると蘭が、

「今の状況って?」

と聞いてきた。

「蘭、俺に付けてた盗聴機で聞いてたんじゃねーのか?」

と新一が聞くと、

「カメラと盗聴機の電源園子が『新一君の答えは新一君が帰って来
てからのお楽しみ』って事で遠隔操作で電源切られちゃったから分
からないの」

と答えた。

新一達は蘭に少年探偵団達が本当に行方不明になった事を話した。

「…ウソ…」

と蘭は声を詰まらせていたが、

「本当だ…早くあいつ等を探さねえと」

と答えた。

すると

「あつ!!新一お兄さんだ!!」

という歩美の元気な声が聞こえた。

8人が振り返ると、歩美、元太、光彦の影がこちらに近づいてき
た。

「元太君!!早く来てくださいよ!!」と光彦に急かされている元
太は何か大きな四角い物を持っていて、

「これ重いんだからしょうがねーだろ!!」

と言っていた。

「みんなどこ行ってたの?凄く心配だったよ!」

と蘭が聞くと、

「あつ蘭お姉さん！！無事だったんだ！！」
と歩美が嬉しそうに言った。

「…答えになつてへんで…」
と平次が言つと光彦が、

「書齋で宝の地図みたいな地図を見つけたのでそれを探してたんです。もしかしたら灰原さんや蘭さんを見つかる手がかりになるかもしれないと思つたので…まあ見つけた物は元太君が持つてるこの大きな箱だけですけど…」

と答えた。

「家の別荘にそんな地図あつたっけ？」

と呟く園子をよそに、

「だったらなんで俺に連絡して来ないんだよ！！」

と新一が言つと、

「だってオメーの探偵団バッチに連絡したけど繋がらなかったぞ！！」

と元太が答えた。

「んな訳ねーだろ」

と言いながら新一がバッチを見るとバッチの電源が切れていた。

「新一…バッチ電源切れてるぞ…」

と快斗が言つと、

「ああ…そう言えば…哀のバッチが砂浜に落ちてた時に悔しくて思わず電源切つたんだっけ…」
と呟いた。

「何やのそれ…」

と和葉が呆れて言つた後、志保が新一に、

「じゃあ、この子達の行方不明騒動はあなたのせいって事ね…」
と冷ややかに言つた。

第17章 帰り道

志保が新一に話しかけているのを見て元太が志保に、

「そう言えばオメー誰だ？」

と聞いた。

元太達と志保は灰原哀としては会った事があるが宮野志保としては会った事が無いのだ。

「えっと…こいつは…」

と新一が戸惑っている、

「私…宮野志保よ！あなた達の友達の灰原哀のところで工藤君達とはある事件で知り合って、今日偶然会ったの…あなた達の事は哀から聞いているわ…吉田歩美さんに円谷光彦君、小嶋元太君ね！」と答えた。

それを聞いて光彦が、

「そう言えば灰原さんに似てますね」

と言った。

すると歩美が、

「哀ちゃん！！ねえ新一お兄さん、哀は？哀ちゃんは無事なの？」

と新一に聞いた。

「あ…ああ、無事だぜ」

と新一が答えると、3人は安心したような顔になった。

すると志保は別荘に戻っても哀がない事に歩美が心配しないように、

「吉田さん、悪いけど今晚哀を借りていいかしら？久しぶりに会ったからいろいろお話したいし…」

と聞いた。

すると歩美は、

「うん！！いいよ！！」

と答えた。

「でも歩美、一人の部屋で大丈夫かよ？」

と元太が聞くと、蘭が、

「じゃあ、歩美ちゃん今日は私と一緒にの部屋で寝よう！部屋は歩美ちゃんと哀ちゃんの部屋で！」

と言った。

「うん！」

と歩美が元気に答えたため、今日は蘭と歩美と一緒に寝る事になった。

話しがまとまった頃青子が、「じゃあ、みんな無事見つかったんだし、博士と蘭ちゃんのお父さんが心配してるだろうから早く帰ろう！」

と言って別荘に帰る事になった。

元太が持っていた大きな箱は、重そうで元太が可哀想だということとで和葉が半ば無理やり平次に持たせる事にした。

帰り道、蘭と新一は皆より少し後ろを歩いていた。

「…悪かったな…最近事件ばかりで淋しい思いさせちゃって…」
しばらく無言で歩いていたら後新一が言った。

「…いいよ…新一、事件解いてる時すごい輝いてるから…」

蘭が少し俯いて答えると、新一は悩んだように、

「けど、何か考えねーとな…蘭を安心させてやる方法」と呟いた。

すると蘭は元気を取り戻して、

「大丈夫！！目暮警部達から事件の電話受けるとすぐ飛んでっちゃう大バカ推理乃介のことは理解してるつもりだから！！…まあ…寂しくないって言うってウソになるけどね…」
と答えた。

すると新一は何か考えている様子で、

「…電話…」

と呟いた。

「…新一？」

と蘭が聞くと、

「そうだ！ー蘭と一緒にいる時くらいは携帯の電源切つとけばいいんだ！ー！」

と嬉しそうに言った。

「…もしかして新一…今までそのこと気付いて無かったの？」
と聞くと、

「ああ」

と普通に答えた。

（新一…たまにこういう所で抜けてるのよね…）
と蘭が考えている時、

「おんやゝ何かお二人さんラブラブですなゝ」

「後ろで何コソコソ話してるんや？」

と園子と平次がニヤニヤしながら聞いてきた。

「服部！！園子！！！」

と新一が驚いていると、

「2人共いいとこだったんだから止めるなよ！！！」

「平次！！もう少し空気を読み！！！」

「あゝあ、いいとこだったのになゝ」

と快斗、和葉、青子まで話しに加わった。

「み…みんな聞いてたの？」

と蘭が聞くと、

「もっちろん！！！」

と園子が答えた。

この後、蘭と新一は園子、平次、快斗に思いつきり冷やかされるはめになった。

第18章 快斗焦る(前書き)

サブタイトルなんか微妙です。

第18章 快斗焦る

別荘に戻って、

「蘭！お前無事だったか！！」

と小五郎が涙目で言った。

「お父さん……」

蘭も小五郎につられて涙目になっていた。

一方阿笠博士は、

「あ……哀君……どうしたんじゃ！？その姿！？」

と思わず言ってしまい、志保に、

「シーツ！！子供達の前では別人って事になってるでしょ！！！」
と注意されていた。

幸い子供達には聞かれて無かったが……

「とにかく皆無事で良かったわい！！！」

と博士が言った時、小五郎が志保に気付いて、

「オオー！！綺麗なお嬢さん！！！」

と叫んで、蘭や新一達にジト目された。

小五郎のセリフを聞いて志保はクスツと笑って、

「あら……迷探偵さんは私が誰か気付いて無いようね……」
と呟いた。

「あのー……どこかでお会いしましたっけ？」

志保のセリフを聞いて小五郎が志保に聞くと、志保は子供達に聞こえないように、

「宮野志保……灰原哀の本当の姿って言った方がいいかしら？」
と答えた。

それを聞いた小五郎は驚いて、

「エエー！！じゃ……じゃあ、あんたあの無口なガキ……」

と叫びかけたが、蘭が、

「お父さん！！シツ！！子供達に聞こえるでしょ！！……あの子達は

「哀ちゃんの正体の事まだ知らないんだから!!」
と言って小五郎を黙らせた。

夕食後、新一、蘭、平次、和葉、快斗、青子、志保、園子、元太、光彦、歩美の11人は何故か新一達の部屋にいた。

「…で…なんでみんなここにいるんだよ？」
と新一が呟くと、

「いいじゃん!!一番広いし!!」

と園子が言った。

「それに、宝箱は平次兄ちゃんがこの部屋に置いてたからここにあるしよー」

と、大きな箱をいじっている元太も新一に反論した。

「でも…この箱開きませんよ…」

と光彦が言うと快斗が、

「ねえ園子ちゃん…針金ある？」

と聞いた。

「あるけど…何に使うの？」

と園子が聞くと、

「いいから、いいから持って来てくれない？」

と言って、園子に針金を持って来てもらった。

「もー…自分で持つてきなよ!!」

園子を取りに行っている間に青子に小言を言われたが快斗はパワーフェースで聞き流していた。

「持って来たよ!!」

園子が針金を持って来ると快斗はそれを受け取った。

「黒羽君それで何するん？」

と和葉が聞くと、

「ん〜…ちよつとね…」

と針金を曲げながら呟いた。

「まあ…だいたい予想はつくけど…」

と志保が呟くと、新一と平次も頷いていた。

「えっ3人共何するか分かるの？」

と蘭が聞くと、

「黒羽が針金を使うと言ったらあれしかねえよ」

と新一が言った。

その時快斗は針金を箱の鍵穴に入れて、その直後、

カチ！！

という音がして鍵が開いた。

「すごい！！快斗お兄さん怪盗キッドみたい！！」

と歩美が大喜びで言ったとき、怪盗キッド本人である快斗とその事を知っている青子、新一、蘭、和葉、志保は苦笑いをして、もう一人キッドのことを知っている平次は、

「そらそうや！！コイツの本職なんやから！！」

と笑いながら言った。

「本職…ですか？」

と光彦が不思議そうに聞くと、快斗は慌て、

「マジックにあるんだよ！！針金で鍵を開けるやつが！！」

と言った。

「へーっ」

と子供達が感心しているとき快斗は思いつきり平次を睨み付けた。

第19章 10年前の写真

平次は快斗に睨み付けられているのをスルーして、元太達に、
「…で、箱の中は何入つとるんや？」
と聞いた。

元太達は大喜びしながら箱を開けたが、箱の中身を見て元太は、
「なんだよ…空じゃんかよ…」
どガツカリして呟いた。

「そんな〜…」

と歩美も悲しそうな声を出したが、光彦が、

「底に何かありますよ！」

と言つて中に入っている物を取り出した。

「写真みたいですね…」

と光彦が写真を取り出すと歩美が、

「あつ！！新一お兄さん達の小さい時の写真だー！！カワイイ〜！！」
と叫んだ。

「本当だ！！蘭姉ちゃんや平次兄ちゃん、和葉姉ちゃんに快斗兄ちゃん、青子姉ちゃんまでいるぞ！！」

と元太が言つと、新一が、

「まさか…俺は服部達とも黒羽達ともも初めて会つたのは去年だぜ…」
と否定したが、

「でも、この2人は新一お兄さんと蘭お姉さんだよね！！男の子は眼鏡掛けてないけどコナン君そっくりだし、その隣の女の子は髪型が蘭お姉さんそっくり！！」

と歩美が写真に写つた新一と蘭を指差して元気に言つて、さらに光彦が、

「この2人は快斗さんと青子さんですね！男の子の方は顔がコナン

君にそっくりですし、女の子の方はこの写真に写ってる蘭さんそっくりです！2人共髪型は違いますけど…」
と続けた。

最後に元太が、

「最後に残った2人は平次兄ちゃんと和葉姉ちゃんだぜ！！色黒の奴と馬の尻尾みたいな髪型した女の子だからよ！！」
と言った。

「う…馬の尻尾って…これはポニーテールや！！」
と和葉が怒って言うと平次が、

「まー、馬の尻尾でもいいやんけ、ポニーテールを日本語に訳すとポニーの尻尾…ポニーは馬なんやから！！」
と笑いながら言った。

写真を見て快斗が、

「…覚えてねーなーこんな写真…誰か覚えてる？」
とが聞いたが、誰も答えなかった。

しかし、しばらくして園子に、

「そういえば…昔…蘭と新一君連れてこの別荘来たことあったな…2人共覚えてなさそうだけど…その時、私用事があったてしばらく2人で遊んでもらったんだけど…新一君が蘭と探検に行っちゃって行方不明になつて…帰って来た時、友達になつたって何人か連れて来たような…」

と言われて、みんな思い出した。

「そうやー！ガキン時、オヤジやオカンに連れられて和葉と伊豆に行ったときそんな事あったなー！！」

「なら、これは私が偶然持ってたインスタントカメラで撮ったやつやねー！」

と平次と和葉が思い出して言うと、

「あつたなー、そんな事…」

「確か…また10年後に会おうって宝の地図描いたんだよねー！！」
と快斗と青子も続けた。

「でもなんで園子の別荘にその地図があるんだ？」と新一が呟くと、蘭が、

「確か…他のみんなはホテルに泊まっててホテルじゃ誰かに見つかって捨てられちゃうからって新一が持って来たんじゃない？みんなの許可とって…」

と答えた。

「あら…その10年後って今日みたいよ…」

写真の裏に日付が書いてあることに気付いた志保が言うと、あまりの偶然に皆啞然としていた。

第20章 旅行最終日（前書き）

これで完結です。

今回は最後以外哀がメインです。

第20章 旅行最終日

次の朝、既に志保は哀の姿に戻っていた。

哀が部屋を出ると、

「あつ！！哀ちゃんオハヨー！！」

と歩美の元気な声がした。

「…おはよう吉田さん…」

と哀が答えた時、光彦と元太も哀の所にやって来た。

「灰原さん…無事で良かったです！」

と光彦が言った後、元太が、

「灰原、昨日いた志保って姉ちゃんはまだ寝てんのか？」
と聞いた。

哀は、志保と自分が同一人物とは言えないので、

「ああ…あの人なら朝早く帰ったわよ…忙しい人だから…」
と答えた。

その時、

「みんな〜！！ご飯だよ〜！！」

という蘭の声がしたため4人はダイニングへ向かった。

朝食後、旅行最終日だということもあり皆海で遊ぶことになった。

博士と小五郎は近くの釣り場で釣りをしていて、子供達と新一、平次、和葉、快斗、青子、園子が遊んでいる時、哀はビーチパラソルの下で休んでいた。

すると、その様子に気付いた蘭が、

「あーいちゃん！！どうしたの？もしかして前みたいに具合いでも悪くなっちゃった？」

と心配して聞いた。

「アリガト…大丈夫よ…少し疲れただけ…」

と哀が答えると、蘭は笑顔で、

「良かった!!!」

と答え、

「あつ！そうだ！！昨日元太君達が見つけた写真だけだね、まだ偶然が続いたんだよ！！」

あの写真を撮ってくれた人、私達と同年くらいか少し年上くらいの女の子だったんだけど…その子茶髪でウェーブのかかった髪型でとっても可愛い女の子だったんだ!!!で、中学生か高校生くらいのお姉さんと一緒にいて、もしかしてって思って新一に聞いたんだけど…哀ちゃんにはお姉ちゃんがいるんだよね？」

と聞いた。

「え…ええ…」

と哀が少し悲しそうに答えると、

「ゴメン…新一に聞いたけど…哀ちゃんのお姉さん殺されちゃったんだよね…思い出させちゃってゴメン…」

と蘭は辛そうに謝った。

そんな蘭に哀は、

「いいのよ…気にしないで…大丈夫だから…」

と蘭を心配させないように答えると蘭は優しく微笑んで、

「アリガト…さっき言いかけた事なんだけど…今言った女の子って哀ちゃん…いや…志保ちゃんだったんじゃない？」

と聞いた。

すると哀は少し考えて、

「そういえば…その頃一度だけ…お姉ちゃんと一緒に海に遊びに行ったことがあったわね…もちろん、組織の監視付きで…もしかしたらそれ私かもね…」

と答えた。

「やっぱり!!!じゃあ哀ちゃんも10年前に私達に会ってたんだね!!!」と蘭が言ったとき、

「蘭、哀、何してんだ？こんな所で？せつかくの海なんだからちゃんと遊ぼうぜ！！」

と言いながら新一が来た。

「そうね！！行こ哀ちゃん」

「ええ……」

と、蘭と哀は新一に呼ばれて海へ向かった。

旅行の帰り、哀と子供達は博士のビートル、その他の皆は小五郎のレンタカーに乗って帰った。

その途中の車の中、隣同士に座っていた新一と蘭は疲れてお互いに仲良く寄りかかりながら眠っていた。

(END)

第20章 旅行最終日（後書き）

やっと完結しました。

題名の『海の輝き』の『輝き』の意味全く無しです…。

自分の事ながらどうしてこんな題名にしたんだろ？

次回作の秋編はあんまり秋関係無いかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0264i/>

海の輝き

2010年10月11日13時56分発行